『フェリアの空にさよならを！』

ー惑星フェリア・シリーズⅠー

ＡＣＴⅠ　「PROLOGUE FERIA」

あー頭にくる。なんで、あいつはいつもああも無神経なのよ。
「あっ、そこで停めて、あとは歩いていくから。」
「ん･･･。」
あたしは乱暴にワーゲンのドアを閉めると、裕章くんにサヨウナラも言わないで、目の前の２４時間営業のリカーショップも兼ねているコンビニエンスストアへ入っていった。
玉子とハムとチーズ、それに缶詰類。最後にお気に入りのカティサーク。こんな日に黙って寝るなんて芸当のできないあたしは、たぶんもう一度飲み直さないととてもじゃないけど精神がもたない。
あたしが買い物袋を提げて出てくると、裕章くんはまだその状態で待っていた。
「まだいたの？歩いて帰るって言ったでしょ。」
べつに裕章くんが悪いという訳じゃないことはよく分かっているんだけど、八つ当たりというのかどうしてもきつい言い方になっちゃう。
「うん、一言だけ言いそびれていたからね。」
窓を半分だけ開けて、そこから顔を出すようにして喋っている。
「あまり飲みすぎるんじゃないよ。強くないんだから。んじゃ、おやすみ。」
片手を振って窓を閉めると、ちょっとうるさいエンジン音を残してワーゲンが走り去る。大宮ナンバーのブラウンの奴。あたしはしばらくワーゲンの走っていった方を眺めていて、やがてアパートの方へと歩き出した。まだ１０月だというのに少しだけ肌寒い。
だいたい優しすぎるんだよね、裕章くんは。いつもお宅には感謝しているんだけどね。なんか間が悪いっていうのかな、いっつもあたしの機嫌の悪い時ばかり居合わせている。今度セーターでも編んであげようかな。裕章くんならブルーが似合いそう。それも明るいスカイブルーが。うん、それくらいしなきゃ、次に会わせる顔がないよ、あたし･･･。
トントントンとリズムよくアパートの階段を上ると、手前から二番目のドアがあたしの部屋。だけど、あたしは自分の部屋を通り過ぎて左隣の桂木さんの部屋の前に立った。
フーッと大きく深呼吸をしてから、ドアを３回ノックする。
「桂木さぁーん。桂木さん。」
だけど、部屋の中からは返事がない。電気が点いているし、この時間に桂木さんが滅多なことでは出かけないのも知っている。
「桂木さぁーん、ねぇ、いるんでしょう。桂木さんったらぁ。早く出てきてよぉ。」
あたしはドアを背にしてその場でしゃがみこんじゃう。いるのは分かってるんだから、サッサと出てきたらどうなのよ。もし、これで風邪でもひいたら、ぜーんぶ桂木さんのせいにしてやるんだから。
でも、ほんとに出てこないわね。ま、いいや、この間に自己紹介でもしちゃお。
あたしは森柄鈴子っていうんだ。東京のとある出版社に三年前の春から勤めている。最近、あたしもようやく自分の仕事を貰えるようになったのよねぇ。今まではお茶汲みやら電話番やら、はっきり言って雑用ばかりだったんだもん。
でも、優記に･･･。えーっと、優記っていうのはあたしの飲み友達であり仕事仲間でもあり、おまけにあたしの初恋の人の弟という仲なんだけど。その優記に言わせるってぇと、あたしなんかジャーナリストの端っこにも入らないんだそうで、未だに一人前に認めてもらっていないのよね。
そりゃあ、あたしだってそうじゃないかなぁとは思うところもあるんだけどさぁ、あたしだって多少の･･･ううん、少々のプライドくらいはあるんだから、後から入社してきたあんたに言われたら、あたしの立場ってぇもんがないじゃないの。

今日だってさ、会社を引けてから優記と裕章くんの三人で飲んでたんだよね。優記のお兄さん、つまりあたしの初恋の相手である優一さんと、あたしの親友である聖美の結婚のお祝いに何を贈るか相談するはずだったのに、優記ったら急に仕事の話しを持ち出したりしてさ、あたしの仕事のケチつけてくれちゃって･･･。あたしだって少しは傷つくんだぞ。
あーぁ、優記にせめて裕章くんの優しさの半分でもあればねぇ･･･。
結局、喧嘩別れみたいな形で帰ってきちゃった。わざわざ車で送ってくれた裕章くんには本当に悪いことしちゃったな。
「桂木さぁーん、いるのは分かっているんだからねぇ。早く出てきてよぉ。」
ようやっとドアの向こう側でガタガタと音がしたと思ったら、今度は物凄い破壊音が聞こえてくる。どうやら桂木さんったらかなり慌てている様子。
三分ほどして、ようやくドアが開いて桂木さんが顔を出した。
「よぉ、どうしたん･･･。あれっ？」
「ここよ、もっと早く出てきてよ。お尻が冷えちゃうじゃないの。」
あたしがドアの横でペタンと座り込んでいたもんだから、ドアの隙間から普通の高さで顔を出した桂木さんからはあたしの姿が見えなかったらしい。
「ねぇ、つきあってくれない？」
あたしは持っていた買い物袋からカティサークを取り出して、桂木さんに見えるように持ち上げた。
「うーん、どうするかな。今ちょっと手が離せそうにないんだけど･･･。」
「あ、また新しい研究を始めたんだ？じゃあ、邪魔しちゃ悪いわね。」
ちょっと拗ねるような顔を見せて、ゆっくりと立ち上がろうとする。
「いや、いいよ。ちょっとだけ待っててくれ、すぐ片付けるからさ。どうせ何か話したいことがあるんだろ？」
「うん、まぁね。」
あたし、けっこう素直に頷いた。
「よし、じゃ、すぐ片付ける。」
寒風が肌にあたってなんとなく気持ちがいい。そうよねぇ、もう１０月になるんだもん。風も冷たくなる訳だわ。そういやぁ、シティ、ちゃんと駐車場に入れたっけ。真っ赤なボディに若葉マークの跡が二ヶ所もべったりと残ってるホンダの車。あぁ、違うって、今日は会社に置きっ放しで帰ってきちゃったんだっけ。明日の朝は早く起きなきゃなぁ。聖美にでもモーニングコールを頼むか。
あー、そんなことより聖美んとこに電話する筈だったんだ。。聖美、怒ってんだろうなぁ。でも、みぃんなあんたの義弟が悪いんだからね。文句なら優記のほうへどうぞ。あたしはあんたのお叱りを受けるなんて目いっぱいパスだから。
「オーケー！入っていいよ。」
あたしは一応ズボンの汚れをはたくと、買い物袋を持ってドアを開けた。
「お邪魔しまぁす。ふーん、今日は意外と部屋がきれいなのね。洗濯もんは押入れなんかに突っ込んじゃ駄目よ。あたし、それくらいならやってあげるからね。」
「分かっているよ。ほれ、その辺に適当に座っていてくれ。いま氷を持ってくる。」
そうなんだよね、あたし、水割りには氷が浮いていないとどうしても駄目な性格なんだ。しかも、できることならアルファベットの形をしてる奴。デパートを５軒も回ってやっと見つけたんだから。それを自分ちじゃなくて桂木さんのとこに置いているのはわざとだけどね。
あたしが缶詰類をテーブルに置くと、桂木さんはキッチンに氷と缶切りを取りに行った。
よぉし、この辺で少し桂木さんのことも紹介するかな。フルネームは桂木潤。たしか２６歳で、あたしより３つ年上だったと思う。詳しいことはあたしもよく知らないんだけど、どっかの教授だか科学者だかの息子で、そのせいか桂木さん自身もすごい発明狂なのよね。でも、いつも訳の分かんない物ばっかり作ってんの。本人は何か目的があるらしいんだけど、誰にも教えるつもりがないようで、いつもそのうち説明してあげるよって言っては笑ってはぐらかされちゃうんだ。

　でも、こういう風に紹介するとまるで変人みたいに聞こえちゃうけど、おかしいのは作っている物の方だけで、桂木さん自身はとっても優しくてあたしの愚痴だって聞いてくれるし、頼りがいのある素敵な恋人という感じかな･･･、まだ片思いだけどね。
　だけど、あたしがいつか優一さんのことをきちんと整理がついたら、そうしたら本当に告白しようかなぁ･･･なぁんて思っている。いつのことになるか分からないけど･･･ね。
「それで、今日はいったいどうしたって？まさか、また優記くんと喧嘩したなんて内容じゃないだろうな。」
　グラスにはアルファベットの氷が浮いている。今日はＩとＬの２文字。
「だって、ひどいんだよ。あいつったらさぁ･･･。」
「聞かない。」
「えっ？」
「この間も言ったろ。優記くんと喧嘩するのは構わないけど、俺にいちいち持ってくるなって。だから、今日はリンの愚痴は聞いてやんない。」
「そんなぁ･･･。」
　桂木さんにそんな言われ方されたら、あたし、頼る人がいなくなっちゃうじゃない。でも、これだけは言えない。この言葉を言ったら、桂木さんと今までどおりに会えなくなりそうで怖い。
　下を向きそうになった顔を無理して桂木さんの方に向ける。これがあたしの今の精一杯。ごめん･･･そう言いかけて、その途端に電話のベルが鳴り出した。
「あ、それ、出なくていいよ。」
　間髪を入れずに桂木さんはそう言った。
「なんでよ、相手の人に悪いじゃない。」
　この時、あたしの方が電話の近くに位置していたのよね。それで、あたしは桂木さんの制止に逆らって受話器を取ろうと右手を伸ばした。
「出なくていいって言っているだろ。」
　さっきより数段きつい声。でも、それを無視して受話器を持ち上げたら、やっぱり同じように手を伸ばしてきた桂木さんとぶつかって、避けようとしたあたしともつれた拍子に受話器のコードが千切れてしまった。
「あ･･･。」
「これ、電話じゃないんだぞ！」
「そんなぁ･･･。」
　電話じゃないって言われたってもう遅いわよ。あたしの右手にはコードの切れた受話器があるんだから。
「どうしよう。」
「どうしようって言ったって、どうしたらいいのかなんて俺にも分からないよ。まさか、こんな事態になるなんて想定していなかったからね。」
　部屋の照明がスーッと消えた。ブーンという低い唸り声に近い音と共に、部屋のあちらこちらに置いてある得たいの知れない機会のインジケーターが次々と点滅を始める。
「リン！早く逃げろ！部屋の外に出るんだ。」
「えっ？」
　言うが早いか、桂木さんは素早く部屋の外に転がり出て、あたしの方に手を伸ばしている。
　あれっ･･･、目がおかしい。桂木さんの姿が歪んで見える。ほら、暑い日に路上でよく見える奴、え一っと、陽炎だっけ、ああいう感じ。
　目をこすって、もう一度よく見ようと瞬きをしたけど、今度は部屋全体も歪んで見える。もう、桂木さんの顔も識別できないくらいグチャグチャになっていて、何か叫んでいるようだけどドンドン大きくなってきた機械音に打ち消されちゃってよく聞き取れない。身体を動かそうにも全然いうことをきいてくれない。助けてぇ･･･と叫びたいのに何故か声にならない。
　目の前がゆっくりと暗くなってきて、桂木さんのシルエットもスーッと闇の中に消えていく。どうやらあたしはそのまま気を失っちゃったみたい。
「リン、どんなことがあっても助けに行くからな。くじけるなよ･･･。」

　最後にそんな言葉が聞こえてきたような気がしたけど、桂木さんの声だったかどうかもよく分からなかった。

ＡＣＴⅠ　「PROLOGUE FERIA」

S60.3.MAR <<H18.4.JAN>>

ＡＣＴⅡ　「FERIA」

　あたしが気づいたのは固いベットの中でだった。暫く状況が飲み込めずにボーッと天井を見つめながら考え込む。
　あたし、どうしたんだっけ？なんか頭の中がぐちゃぐちゃしてて何も思いだせない。どうも記憶の一部が欠落しているようだわ。
　あたしは部屋の中をグルッと見渡して、何か手がかりになるような物がないかと思ったんだけど、生憎とここに見覚えのある物は何もなかった。
　ちょっとこの状況はまずいかも･･･。本当に何も分からないじゃない。そうだ、あたしの名前･･･。え一っと、そうそう、森柄鈴子･･･レイコよね。山羊座のＡＢ型で 12 月 24 日生まれ。うん、自分の名前ぐらいはちゃんと出てくる。
　とにかく、ここが何処で、あたしはどうしちゃったのか聞かなきゃ･･･、誰かいないのかな。そうよ、桂木さんだわ。桂木さんに聞けば全部分かる筈。
　ベッドから身体を起こしかけた途端に、言いようもない激痛が全身を駆け抜ける。
「痛い！いたたたたた･･･。」
　なんというか、まるで全身筋肉痛。とてもじゃないけど 生半可な気持ちでは動かせそうにない。いったい、何があったというのよ。もう･･･。
　それでもそ一っと痛くないように身体を起こして、やっとのことでベッドから降りた。まったく、ベッドが柔らかくなくて助かったわ。もし、ふわふわのベッドかなんかだったらとてもじゃないけど起きられないところだったもん。
　さて、起きたはいいけどどうしようか。部屋は見るからに殺風景で、ベッド一つある他は窓すらないじゃない。とにかく、あたしんとこのアパートじゃないことだけは確かだけど、だとすりゃ、やっぱり病院か何かって線が一番濃厚かな。冗談じゃないわよ、入院なんかした日にゃ、また編集長に怒られるじゃない。それにお金･･･、この間ビデオデッキを買い換えたばかりだしなぁ、貯金なって全然ないわよ。
　もう、これは逃げるしかないじゃない。それに、もしここが病院じゃないにしたって、こんな殺風景なところじゃ何も情報は得られないしね。
　こう判断したところで少し気分が落ち着いてきた。まず必要なのは何かって考えるとやっぱり体力よねぇ。痛いのを少し我慢して体のあちらこちらを動かしてみる。まぁ、痛いのは痛いんだけど、少し動いたせいかさっきよりかはかなりまし。うん、なんとかなりそう。
　そ一っとドアに近づいて、ノブに手をかけようとした瞬間･･･。自然にドアが外側へ逃げていく。掴もうとしたノブがなくなったせいで、体重のバランスを崩してドアとともに外へとよろけ出てしまった
「うわっ！あんた、気ぃついてたんか。どう動ける？動けるんなら説明するさかい。あたしの後についてき。」
　ドアの外に立っていたのは、ショートヘアで妙な服を着た、なんか気の強そうな女の子。ドアを開けたのはたぶんこの子ね。唖然としているあたしにお構いなく、ニッコリ微笑んでみせて、右手の人差し指である方向を指差して歩き出す。
　さぁて、どうしようか。この子を見た限りじゃ、少なくとも看護婦には見えないし、どっちかって言うと、よくアニメかなんかで見るようなバトルスーツっていうのかしら、そんな服を着ているし、おまけに腰にはご丁寧にブラスターなんかぶら下げているんだもん。誰がどんなコスプレをしようとそれは構わないけど、できることならそんな仲間にはちょっと入りたくないな。
「どうしたん？まだ、どこか具合悪いんか？」
「えっ？えぇ、いや、あ、大丈夫です。はい。」
　我ながら間抜けた答えだ･･･。
「そんなら、いいけど。」
　なぁんか、すごく真剣に心配してくれているのが分かる。
　よぉし、覚悟を決めちゃえ。どうやら悪い人じゃ無さそうだし、ともかくもこのままじゃ埒があかないというのは事実だもん。

　という訳で、あちらこちらに痛みが走る身体を引きずって彼女の後をついて行く。気にしてくれているのか、あたしに合わせてかなりゆっくり歩いてくれるんだけど、それでもまったく彼女に追いつけない。どんどん離されていく感じ。
　ん？いま気がついたけど、この建物には通路にすらまるっきり窓が無いじゃない。しかも、同じような壁がず一っと続いていてまるで迷路のよう。こんなところで一人にされたら、間違いなく完全に迷子になるだろうな。
　なんとなく急にここで置いてきぼりにされる想像をしてしまって恐怖心に襲われる。慌てて彼女に追いつくと左側にピッタリと身体を寄せた。あたしも妙なところで心配性なんだよね。
「ねぇ、ここは何処なの？この建物も珍しい構造しているし、あなたの格好も普通じゃないし。」
　これってさっきから知りたかったことの一つ。彼女の方から喋ってくれるかなと思って我慢していたんだけど、何にも喋ってくれないんだもん。やっぱり好奇心には勝てないんだわ。
　でも、彼女、あたしの質問にはまるで答えてくれなかった。ただ、口は開いてくれたんで、取り敢えずは上出来かな。
「ねぇ、あんた、地球人？イオルス人？それともクロスから来たん？」
　なぁに？せっかく喋ってくれたのはいいけど、なんであたしがエイリアンか何かにならなきゃいけないのよ。あたしは生まれも育ちの地球なの。生粋の地球人なんだから。
　まぁ、それでもここで怒ったところでどうにかなる訳じゃないし、彼女の言い方もいたって真面目な言い方で、あたしとしても非常に気になったんで、取り敢えず普通に答えておくことにしよ。
「もちろん地球人に決まってますよ。そんな莫迦げた質問･･･。」
　･･･と、ここまで言いかけておいて急に嫌な考えが頭をよぎる。
「まさか、あなたは違う星の生まれとか言わないでしょうね。」
「ん、そやな。一応はあたしも地球人なんやけど、ここには違う人もいるさかい。ま、気にせんといてな。」
　可愛い顔して、こうも大変なことをあっさりと言われると、はっきり言って怒る気もしない。だけど、あたしの嫌な考えってぇのもあながち外れていないというのも気になる。
「ねぇ、ということは、ここに宇宙人って言うのか、異星人っていうのか、そのぉ、だからぁ、地球人じゃない人がいるっていうの？」
「まぁ、どっちかって言うと、あたしらの方が異星人なんやけど。まぁ、そういう意味では大勢いるわね。」
　げげぇ、あたし、そういうのって思いっきりパスしたい。なんか初めから嫌な予感がしていたんだけどね。
「ん、どうしたん･･･。あぁ、大丈夫や。この基地におるんはみんな地球人やから、そんな顔せえへんでも･･･。」
　あたしが露骨に嫌な顔をしたの、彼女、しっかりと見ていたみたい。だけど、なんとなくホッとしたわ。何の心の準備もなしにいきなり会わされたら、どうしようかと思ったもん。そういう意味では、この嫌な問題は置いておくにしても、取り敢えずの目的、ここがどんな所かという情報を得るってことには、彼女との会話が少し役立ったかな。
　まず、ここは何かの基地で、地球人以外の人とも接触を持っている。しかも、考えたくはないけど、ひょっとしたらここは 地球以外の場所って可能性もある。それなのに彼女は地球人なんだ。
　ん、ちょっと待ってよ。あたしがいくらニュースに疎いと言っても、地球以外の場所にそんな基地を建設なんて話し、全然聞いたことがないわよぉ。そりゃあ、極秘事項の物だったりすればニュースなんかで発表したりしないだろうけど。でも、なんで桂木さんの部屋にいた筈のあたしが･･･。
　恐ろしいほどの勢いで、必要な記憶だけが次々と頭の中で甦ってくるのを感じる。
「あんた、どこまで行く気？」
　ほえ？考え事をしていて、彼女が止まったことに全然気がついていなかった。それどころか前を歩いていた彼女を追い抜かして先に行こうとしていたみたい。声をかけられて初めて気づいたあたしは、慌てて戻ってくる。

　セントラルルームと書いてあるドア、彼女が一歩近づくと、ウィーンという震動音と共にそのドアが勝手に開く。要するになんていうことのない普通の自動ドア。彼女に続いてあたしもその部屋に入る。
　部屋の中はちょっと薄暗くて、両側の壁にある赤や黄色の光だけが、その広い部屋を朧気ながら照らしている。目を凝らしてジーッと部屋の様子を窺うと、奥の方に一人の男の人がいるのに気がついた。でも、あたしが彼女に尋ねるのよりも早く、彼女がその男の人を呼んだ。
「ショウ！彼女、起きていたから連れてきたわ。彼女･･･と、そういやぁ、まだ名前も聞いてへんかったなぁ。あんた、なんて名前なん？」
　その瞬間、部屋の中の照明が一斉に点いて、その男の人の顔がはっきりと見えた。うーん、どっかで会ったような･･･。何処でだっけ？たしかに前に一度会っている筈。でも思い出せない。まだ、記憶がきちんと元に戻ってないのかなぁ。
　だけど、彼の方でもあたしの顔を見て何かに気づいたらしく、しきりと首をひねって何かを思い出そうとしている。ということはぁ、やっぱりどっかで会ってんだ。
「レイコちゃん･･･。たしかぁ、森･･･、森なんとかレイコって名前だろ？うん、そうだ、思い出した。」
「え、えぇ･･･。」
　あたしの名前を知ってるということは、やっぱりどっかで会っているんだ。うーん、こうなってくると、もう疑う余地はないんだけど、だけど誰だっけ？
「ショウ、知ってるの？」
「あぁ、たしか中学の時、優一にいつもくっついていた子だろ。その時に一度名前を聞いたんだけど･･･。」
　優一さんを知ってるってぇことは･･･。あの頃、あたしは優一さんオンリーで、他の男の人なんてほとんど覚えてないんだけどね。でも･･･。
　ん？あーっ、あの顔にメガネをかければ･･･。そうかぁ、思い出した。
「副会長さん！えぇーっと、たしか尾田先輩？」
　優一さんが生徒会長をやっていて、その時に一緒に副会長をやっていた人。あの頃、あたし達一年生の間では、優一さんと尾田さんのことを秀才コンビって呼んでいたんだ。でも、急に安心してきた。こういう場合、たとえあまり親しくなかった人じゃなくたって、知ってる人に会えたっていうのは、精神的にはすごぉく心強い。
　あたし達二人の様子を見ていた最初の彼女が不思議そうな顔をして、あたしと尾田先輩の顔を交互に見ている。
「ねぇ、いい加減あたしにも説明してくれん？さっぱり訳が分からんわ。」
　そりゃあ、無理ないと思う。
「あぁ、悪かった。紹介するよ。彼女は僕の中学の時の後輩なんだ。」
「えーっと、改めて自己紹介するわ。あたし、森柄鈴子っていうの。鈴の子供って書くんだけどね。」
「ふーん、んじゃ、あたしも。あたしは泉沢さとみ。ここではサーミンって呼ばれてるさかい、レイコもそう呼んでな。」
「うん、じゃ、よろしく。」
　あたしが差し出した右手に、彼女も右手で応えてくれる。
「ところで、さっきもさとみさん･･･じゃない、サーミンに聞いたんだけど、ここは一体何処なんです？」
　尾田さん、なぜかやっぱりって顔して、サーミンの方へ振り向いた。
「どこまで話したの？」
「ぜーんぜん。レイコを傷つけずに説明できる程、あたしは器用やないもんで。」
「そうかぁ、そうだろうな･･･。じゃ、やっぱりアトリーかな。こういう役目をこなしてくれるのは奴しかいないからな。サーミン、悪いんだけど･･･。」
「ん、分かっているって。じゃ、オーロラ使うさかい、あとはよろしく。」
　あーん、また核心に行く前にはぐらされてしまった感じ。どうもこの話題については二人とも話したがらないんだけど。やっぱり、ここが本当に地球じゃないってことなのかしら。

　とにかく、あたしだけが分かっていないというのは耐えられない。何でもいいから情報が欲しいのよぉ。
「ねぇねぇ、二人で話さないで、あたしの質問にも答えてよ。これでも少々のことじゃ驚かないつもりだからさぁ。」
「でもなぁ･･･、サーミンの例もあるし、正直言ってどう説明していいか分からないんだ。悪いとは思うけど、説明できる人のところまで連れて行くから、ここは我慢してくれないかな。」
「そんな･･･。あたし、大丈夫だと思うけどな。たとえここが地球じゃないって言われてもね。それくらいだったら驚かないくらいの自信があるわ。」
　尾田さんとサーミンったら、二人して顔を見合わせて、それで肩をすくめてみせる。ちょっと、カマをかけてみたけど、やっぱり大当たりかな。しかも、雰囲気的にはまだおまけがありそうだし･･･。
「そうか、仕方がないだろうな。どうせすぐ分かることだし、そこまで言われちゃあね。」
　そう言って暫く考え込むと、すぐ近くにあったキーボードを叩いた。
　中央にある大きなスクリーンがパッと明るくなって、荒涼とした平原が映し出された。感じとしては一世紀前のアフリカ大陸って感じが一番似合っている。
「レイちゃん、よぉく聞いてくれよ。ここはレイちゃんが言ったとおり地球じゃないんだ。地球うからは遠く離れたザル星系第四惑星フェリア。それがこの惑星の名前だよ。僕にはこれだけしか言えないけれど、そのうちすぐにここが大変な場所だってことが分かってもらえると思う。」
　うぅ、ビンゴかぁ･･･。こういう時の勘ってなぜか当たるんだよねぇ。
「や、嫌だなぁ、二人ともそんな深刻な顔をしなくたって、あたしは大丈夫ですよ。」
　でも、そう言いながら自分の顔のほうがよっぽど引きつってるだろうなっていうのが分かる。参ったなぁ、もしかしてぐらいの気持ちだったのに、いったいどうやったらそんな夢みたいなことに巻き込まれるっていうんだろう。
　ただねぇ、スクリーンに映っている風景は、どう見ても地球上の風景じゃないんだけど、それはあくまでも作り物じゃなければの話し。だって、空が赤いのよ。ううん、赤というよりはピンクって言った方が近い。こんなのって信じろっていう方が無理だわ。
「じゃ、レイコ、行こうか。」
「レイちゃん、スクリーンの映像だけじゃ、どうせ信用なんか出来ないだろ。行って、自分の目で確かめてくるといい。」
「うん。」
　尾田さんもサーミンも冗談で言ってるんじゃないってことは、その目を見ていればなんとなく分かる。だけど、いくらなんでも他の星にいるなんて、そんな莫迦なことって起きえるの？だいたい現代の科学力じゃ、どう頑張ってみても太陽系内がやっとなのよ。どう考えてみても理解できない。
「じゃ、サーミン、頼むな。」
「はいよ。んじゃ、ちょっと行ってくるわ。」
　あたしはさっきみたいにサーミンの後ろについて格納庫らしき所まで来た。ジープやオートバイやらが、きちんと並んでいて、その奥にはブーメランみたいな形の飛行機が並んでいる。まるで特撮映画でも見ているみたい。
　サーミンは、そのうちのシルバー地にブルーのラインが入ったジープに乗り込んだ。あたしも続いて助手席に乗り込む。
「ショウ、ええよ。ゲートを開けて。」
「了解、アトリーによろしくな。」
　サーミンが通信機のレシーバーを置くと、目の前の壁だと思っていた所が、ゆっくりと外側に倒れていく。それと共にだんだんと外の景色が視界いっぱいに広がっていく。
　あたしの予想としては、ここで東京のビル街か何かが見えて、ドッキリカメラですってプラカードを持ったお兄さんが現れるのを期待したんだけど、残念ながらあたしの目の前にはさっきスクリーンで見たのと同じ荒涼とした平野が広がっていて、見渡す限り建物の一つも見えやしない。
　しかも、しかもよ、本当に空がピンクなのよぉ。これはどう見たって不気味な景色ったらありゃしない。もう、落ち込んじゃうよ、あたし･･･。

「さぁて、出発や。」
　思ったより震動音も感じさせずにスルスルッとジープが走り出す。
「どう、驚いたやろ。まぁ、これ見て驚くなって言う方が無理やと思うけど。」
「ねぇ、どこに行くの？」
「ん、ラオコーンって呼んでいるコンピューターのある要塞や。この惑星には、うちんとことそこにしか人間がいないんや。で、そこに行けばレイコの質問に答えられる人がいるから。」
「ま、まさか、異星人？」
　あたしはさっきのサーミンの言葉を思い出して、一瞬化け物みたいな宇宙人を想像してしまう。
「まぁ、そうやけどな。でも安心してええよ。見た目はあたしらと全然変わらんから。」
　サーミンったら優雅に笑っているけど、あたしにしてみりゃ、けっこう重大なことなんだぞ。
「でも、まぁ、ラオコーンまではちょっとかかるし、この間に少しくらいの予備知識はあたしでも教えられると思うよ。」
「うん。」
　この際、予備知識だろうが何だろうが、何にもないよりはましよ。情報はできるだけ多いほうがいいもん。だけど、今はまずい。今のあたしは現実という物的証拠を突きつけられて、落ち込みかけてんの。これ以上追い討ちをかけるような情報は、ありがたいような迷惑なような･･･。実に困る。
　しかし、そんなあたしを知ってか知らずか、サーミンは話しを初めてくれちゃう。
「まず、この世界のことを話さないとね。ほら、ＳＦ小説とかでパラレルワールドってあるやろ、この世界はあれに似てるんやけど。あたしらの住んでる三次元空間を時間層の違いで五つに分けて、それをそれぞれ三Ａ次元から三Ｅ次元って風に名付けたんよ。で、地球のある空間が三Ｂ次元で、ここは三Ｃ次元って訳なんよ。」
　そんな話し、年頃の女の子がする話しじゃないし、普通のＯＬはＳＦ小説好きなんて少ないと思うけどなぁ。まぁ、幸運にもあたしはＳＦ小説は嫌いじゃない方だし、パラレルワールドって言葉も分からなくはない。
「そんな話しは初めて聞くけど･･･。」
「そうやろな、まだ地球じゃ知られてないって言うてたから。」
「それで、どうやったらその三Ｂ次元と三Ｃ次元を行き来できるっていうの？」
「それはあたしにもよく分かってないんやけど、地球とこのフェリアっていうのが、ちょうど対称の位置にあるらしいて、何らかのエネルギーが加わると一時的に空間がつながってしまうらしいんよ。あたしらは転移って呼んでるけどな。昔からそういうのに巻き込まれて転移してしまう人がいたらしいわ。」
　サーミンのこの話しで、突然嫌な考えが頭を駆け抜けた。どうもここに来てから妙に頭が冴えちゃっているから、これももしかすると当たりかもしれない。
「あのさぁ、ちなみに聞いておくんだけど、地球に戻る方法ってあるんでしょうね。」
　一瞬ビクッと身体を硬直させて、サーミンはまずいって表情を作る。で、すぐにそんな表情を消して笑顔を作ろうとしているんだろうけど、どう見ても引きつっているようにしか見えない顔であたしを見る。あぁ、やっぱり･･･。
「あ、言いたくないなら言わなくていいよ。どうせ、それをこれから会うアトリーさんだっけ？が説明してくれる予定だったんでしょ？」
　地雷踏んだなぁと思いながら、慌てて質問を取り消そうとすると、サーミンは静かに首を横に振って答えた。
「いいんよ、どうせ言わなきゃいけない話しなら、早めに言うておいた方がいいわ。」
　ジープは荒涼とした平野から背の低い草が生えている原野と進んでいく。
「無い筈はないんよ。でも、はっきり言うて現在のところ分かってないていうのが現実なんよ。もっとも、あたしらの中で帰りたいって人が今のところいないんで、まだ調べてないだけなんやけどね。」
「そう･･･。」
　やっぱり･･･。でも困るなぁ。このまま帰れないとなると、間違いなく編集長には怒られるだろうなぁ。せっかく新しい仕事を貰ったばかりなのに。

　それっきりサーミンは何も言わずに黙っていてくれる。あたしは涙が溢れてくるのを感じて、わざとサーミンに背を向けた。あたし、自分がこんな風に感傷的になれるなんて 思ってなかった。どんな状況でも笑っていられると思ってた。
　そのままぼんやりと風景を眺めていたら、急に桂木さんのことを思い出した。桂木さんは無事だったんだろうか。そういやぁ、あの電話みたいななの、あれはどうなったんだろ。まさか爆発した訳じゃないでしょうね。桂木さん、一回やってるからねぇ･･･。
　駄目、駄目、こう落ち込んでいると、すぐに物事を悪い方へと考えちゃう。そうよ、うん、大丈夫。どうせ桂木さんがまた変な物を開発して、きっとあたしのことを迎えに来てくれるに違いないんだから。今はこの状況を楽しむくらいじゃないとね。そう考えておけば、ちょっとは元気が出てくるもん。
　涙を拭って前を向こうとした瞬間、車体が大きく右に傾いてタイヤがカーブを描いた。あたし、ちょうど腰を浮かせた瞬間だったから、危うく外に投げ出されるところだった。こんな道もないような平原でなんで･･･。
「サーミン！なんて運転するのよ。」
「レイコ、シートベルトを締めとき。少々、運転が荒っぽくなるよってな。」
　サーミンが指差している方角から、なんて言ったらいいのか、まるで空飛ぶどら焼きって感じの飛行物体が飛んでくる。
「なぁにぃ、あの空飛ぶどら焼き。まさか、これからドンパチやる･･･なぁんて言わないわよねぇ？」
「なに悠長なことを言ってんのや。さっきは言い忘れたけど、この惑星はいま現在戦争の真っ最中なんよ。死にとうなかったら、その辺にしっかりと掴まってき。」
　わぁーん、どら焼きが飛んでくる。ずるい、汚い。そういう大事なことは一番最初に言って欲しかった。
　どら焼き型円盤は、あたし達とすれ違いざまに鋭い閃光を放った。サーミンはハンドルを巧みに操縦してそれを右に左に避けていく。あたしは必死にシートにしがみついて、振り落とされないようにするだけ。あの光に当たるとどうなるのかなんて考えたくもない。
「レイコ、あんた、あと任すよって、運転頼むわ。」
　えぇーっ！！急にそんなこと言われたって、あたしの運転技術なんて、せいぜい若葉マークが取れたって程度なのに困るわよぉ。
「大丈夫や。これオートになってるさかい。ハンドル握っててくれるだけでええんよ 。だいたい、どこにハンドル切ろうとぶつかるもんなんか無いやん。さっ、早く。」
　ぐずぐずして躊躇っているあたしに無理やり運転を押し付けると、彼女は後部シートの方から見たこともないような武器を取り出してきて、縦横無尽に飛び回っているどら焼きに狙いをつけた。あたしはそれを横目で見ながら慌ててハンドルを握りしめる。
　うわぁぁ、速いっ！！
　助手席に座っている時にはそう感じなかったんだけど、ハンドルを握った瞬間にすごい威圧感が襲ってくる。このオーロラに搭載されているコンピューターがうまく避けていてくれるからいいけど、はっきり言ってハンドルを握っているのが精一杯で、運転するなんてとても無理。
　でもねぇ、むこうは飛んでいるんだし、いくらなんでも円盤とジープじゃ性能が違いすぎるわよ。だんだん避けきれなくなってきて閃光が車体をかすめ始める。
　サーミン、早くなんとかしてよぉ。
　うわっ、またどら焼き円盤が正面から突っ込んできた。サーミンはでっかい銃を構えて、それをじっと睨んでいる。すれ違いざま、どら焼き円盤の放つ閃光とサーミンの放った閃光が交差した。思わず頭を伏せたあたしの後ろで、どら焼き円盤の爆発する音が響く。そーっと頭を上げると、あたし達の右後ろでどら焼きが燃えているのが見える。
「サーミン･･･。」
「終わったよ。ご苦労さん。」
　サーミンは銃を後ろに置くと、大きく深呼吸をして運転席に戻ってきた。助かったぁ、彼女に譲るようにあたしはハンドルから手を離して助手席に戻ると、今まで息を止めていたことに気がついて、慌ててあたしも深呼吸をする。

「それにしても、今日のザップは情けなかったわ。もうちょっと歯ごたえがあると面白かったんやけどな。まぁ、レイコの初陣にしちゃ妥当なところやったね。」
　なにが妥当なとこよ。あたしは十年は寿命が縮まったかと思ったわ。彼女、顔はそこそこ可愛いのに出て来る言葉が過激なんだから、この先が思いやられる気がする。
　改めてサーミンがハンドルを握り直して再度出発。
　だけど、あたし一つだけよぉく分かったような気がする。どうやらこの惑星にいる限り、ゆっくりと落ち込んでいる暇すらなさそうだってこと。なんか、もう、思いっきり笑いたい気分。
「レイコ、どうしたんや？」
「ん、なんでもなぁい。あ。そうだ。ねぇ、一つ質問していい？」
　いきなりあたしが笑い出したんで、サーミンはちょっとギョッとした表情を作る。
「なんかよう分からんけど、なぁに？」
　うわぁ、頼むから運転中に手放しで横を向くのは止めて欲しい。何も無い平原だし、ぶつかる物も確かに無いけど、地球だったらこんな運転していたら完璧に事故っている。
「あのさぁ、さっきの話しに戻るんだけど。たしかこの惑星には二ヶ所しか人間がいないって言ってわよねぇ。」
「うん、そうやけど。」
「だとしたら、さっきのどら焼きはどこから来たの？」
　そう、これって絶対に不思議。サーミン達はいったい誰と戦争をしているのかしら。まさか、戦争相手の所に向かっている訳じゃないだろうから、今から行く場所にいる人たちじゃないでしょうし。
「んー、それも話さなあかんかったわな。この惑星な、本当言うと双子星なんよ。ほら、もうすぐ出てくるやろ。」
　サーミンが示した地平線から一つの星が昇ってくるのが見える。し･･･しかし、でかい。ひょっとすると、ここの太陽より大きく見えるじゃないの？！見る見るうちに目の前いっぱいに青緑色が拡がっていく。
「ということは、あのどら焼き円盤はあの惑星から来たって訳？」
「そっ、あれがザル星系第三惑星ジュール。このフェリアの兄星やね。」
　ジュールのちょっと右の方では、そのジュールの半分にしか見えない太陽が今しも地平線の下に沈もうとしている。それと同時にどぎついピンク色が、その太陽を中心にして空いっぱいに拡がっていく。ところが、そのピンクがジュールのところまでくると、今度はジュールの青緑色がその中に混ざり合い、微妙な色彩のグラデーションを浮かび上がらせようとしている。
　と、その時だった。さらにその空に呼応するかのように、オーロラの車体が七色に輝き始めた。そして、それがまるで空に吹き付けられたかのように映し出される。そう、まるで南極のオーロラのように･･･。
「どや、驚いたやろ。これがこのジープの名前の由来なんよ。この減少はフェリア上でしか起きないんや。せやかて、オーロラはフェリア走るために生まれてきた車と言ってもいいくらいなんよ。」
「うん、そうだね。」
　わずか数分後には太陽が完全に地平線の下に沈んで、この大空を使った壮大なショーもおしまい。オーロラも元のただのシルバーの車体に戻っちゃった。明るい陽射しの中で今度はクリーム色の空を映し出している。
　･･･ん？明るい陽射しぃ？いま太陽は沈んだばかりなのになんで空が明るいの？
　ピンク色の太陽が右手の方向で沈んだ瞬間、なぜかジュールの後ろから別の太陽が顔を覗かせている。なんで、太陽が二つもあるのよぉ。
「サーミン、ここ太陽が二つもあるのぉ？」
「ん、違うよ。二つじゃなくて三つや。従って、フェリアには地球で言うところの夜ってぇのがないんや。」
　あ･･･、なんかカルチャーショック･･･。どっと疲れが出てくるのを感じる。
　あたしが横でくじけているっていうのに、サーミンたら陽気に口笛なんて吹いているし。あぁーん、やっぱり地球に帰りたいよぉ。

　ちょっとばかりの現実逃避で目をつぶっていた。このまま目を開けたら東京に戻っていますように･･･。ところが、オーロラが再び大きくカーブを描いて急停止する。まさか、またどら焼き？？？
「サーミン！」
「ん、どうしたん、そんな顔して。ラオコーン基地に着いたよ。」
「へっ？」
　た･･･たしかに。サーミンの顔ばっかり見ていて、目の前にこぉんな大きな建物が迫っているなんて、ぜーんぜん気づかなかったわ。
「悪いんやけど、ちょっとここで待っといてや。ここの連中に話しつけてくるさかい。いい？動いたらあかんよ。」
　それだけ言い残すとサーミンは一人で要塞基地に入って行った。一人残されたあたしはというと、シートに深々と座って、ポカンと空を眺めるくらいしかやることがなかった。無意識のうちにジャンバーのポケットを探って、クシャクシャになったラークマイルドを引っ張り出した。
　暫くジーッと煙草の箱を見つめていて、吸おうか吸うまいか心の中で葛藤なんぞしてみる。箱の中を覗くと残りは微妙にも３本だけ。どうしようかな、ちょっと悩んで結局１本取り出す。そうよね、この先いつ吸えるか分かんないもんね。
　どのくらいの時間が経ったんだろ。腕にしているデジタル時計は変な時間を表示していて、おそらくは役に立っていないんだと思う。第一にここの一日って何時間なのか、太陽が三つもあるような惑星じゃ確かめようもないわよね。
　１本目はとっくに吸い終わって、無意識に２本目に手を伸ばす。あはっ、いま桂木さんが目の前にいたら絶対に止めとけって言うわね。クリーム色の空に向かって紫煙の輪っかを飛ばしてみる。そういやぁ、優記、どうしてっかなぁ。なんか喧嘩別れしたままだし、できれば嫌われたくはないんだけどなぁ。心配してくれ･･･てる訳はないか。あーあ。
「ねぇ、お姉ちゃん、それ、なぁに？」
　ん、いつの間にか、小学生くらいの女の子がオーロラの前に立っていてニッコリと微笑んでいる。やぁーん、メチャ好み！まるで小さい時に読んだ不思議の国のアリスの絵本から、アリスがそのまま抜け出てきたって感じ。
「ねぇねぇ、なんなの？」
「あ、これ？煙草を知らないの？」
「うん、前にそれとおんなじの持ってるお兄ちゃんがいたけど、教えてくんなかったんだもん。ねぇ、お姉ちゃんはどっから来たの？」
「地球。地球の日本って所からよ。」
「へぇ、それ持ってたお兄ちゃんもそう言ってたよ。」
　えっ？
「それって尾田さんのこと？」
「ううん、だって、そのお兄ちゃんは今フェリアにいないもん。」
　じゃあ、他にも日本人がまだいるのか。あ、でも今はいないってどういう意味なんだろう。
「そのお兄ちゃんってどんな人？」
「うーんとね、シグマって言うんだけど、時々しかフェリアに来ないの。」
「普段はどこにいるの？」
「知らない。」
　お嬢さんは可愛く首を横に振る。
　まぁ、シグマって人のことはあとでサーミンにでも聞けば分かるでしょ。
「ところで、お姉ちゃんはこんなとこで何してんの？」
「ん、サーミンにここで待っていなさいって言われて、それで待っているんだけど、サーミン遅いんだよね。」
「サーミンはアトリーのとこだよ、きっと！」
「アトリーって？」
「このラオコーンの最高責任者だよ。サーミンに聞かなかったの？」
「うん、全然ね。あたし、まだ何も教えて貰ってないのよ。」

　この子、人差し指を口元に当てて、ちょっと首を傾げる仕草をする。それが本当に可愛い！！
「じゃ、あたしが案内してあげる。ねっ！」
「でも、サーミンに怒られるんじゃない？」
「大丈夫よぉ。あたしだってこの基地に住んでるんだもの。ねぇ、いいでしょ、ねぇ。」
　あたしの腕を取って引っ張っていこうとする。
　うーん、どうしようかなぁ。どうせここにいたって暇なのは確かだしなぁ。それにこの子の屈託のない笑顔。あたしはこういう笑顔には逆らえない性格なのよね。
「だけどねぇ･･･。うん、いいか。じゃ、案内して貰っちゃおうかな。」
「やったぁ、んじゃ、早く行こ。ねぇ、早くぅ。」
　ピョンピョン飛び跳ねて喜んでいる。
「ちょっと待ってよ。あなたの名前、教えてくれる？」
　くるっとあたしの方に振り返って、両手を身体いっぱいに広げた。
「ビュレット、ビュレットよ。お姉ちゃんは？」
「あたしはレイコ、森柄鈴子っていうの。じゃあ、これからよろしくね。」
「うん。」
　あたしの腕を掴むと、グイグイ引っ張っていく。意外と力があるかもしれない。基地の中に入っていくと、嫌なことに建物の構造がさっきの基地と同じじゃない。まるで碁盤の目のように通路が続いていて、更に悪いことにはさっきの基地よりおそらくはずっと広いってこと。間違いなくここで一人にされたら、あたしは迷子になる違いない。
　それなのにビュレットは迷う様子も見せずに、スキップまでして軽快に歩いていく。
「ちょっ、ちょっと待ってよ。」
「ん、お姉ちゃん、どうしたの？」
「めげてんのよ。あなた、よくこんな迷路のような通路で迷わないわねぇ。なんでここの建物は、こんなややっこしい構造をしているのよ」
「たいしたことないよぉ。それにゼウス基地よりゃ簡単よ、通路に目印あるもん。」
「あ、そう･･･。」
　そんな風に言われたって、何が目印なのか分かんなきゃ結局は意味がないじゃない。それに思い出したんだけど、あたしってたぶん方向音痴なのかもしれない。そのせいか直感的にこういう構造って好きになれない。
　でも、そんなビュレットが少し険しい表情である所で足を止めた。そして、ゆっくりとあたしの方に振り返った。
「どうしたの？」
「あのさぁ、一つ聞きたいんだけどぉ。お姉ちゃんって、犬は大丈夫？」
「そうねぇ、犬なら嫌いじゃない筈よ。」
　一応は記憶を探ってみるけど、犬嫌いだったなんて記憶は思い当たらない。まぁ、たぶん大丈夫でしょ。
「でもぉ、ちょっと普通じゃないの。だからぁ･･･。」
　この子のこういう部分が特に可愛いの。まったく、抱きしめたくなっちゃう。
「大丈夫よ。つまり、あたしにあなたの友達を紹介してくれる。そうなんでしょう？」
「うん、だけど、本当に大丈夫？」
「いいの。ほら、早く。」
　険しかったビュレットの表情が見る見るうちに明るくなっていく。うーん、本当に可愛いなぁ。
「よかったぁ、もし嫌いだったらって、あたし、そればっかり考えていたの。」
　ビュレットはナンバー４と書かれたドアを開けて、ニッコリ微笑みながらどうぞって感じで部屋の中を指し示した。
　あたしはというと、ああいう風にビュレットには言ってみたものの、なんか彼女の言い方が気になってきたのよね。ビュレットは先に部屋に入ったんだから、べつに生命に差し障りがある訳じゃないでしょうが･･･。

　あたしは部屋の中を覗き込むようにして、そーっとそーっと中に入る。でも、取り越し苦労だったみたい。部屋の中では先に入ったビュレットがニッコリ笑って立っているだけで、なぁんとなく拍子抜けした気分。
「ねぇ、犬は？」
「フフッ、どこを見てんの、足元よ。」
　へ？なるほど、あたしの足元には手のひらに乗るくらいの小さい犬が、ちゅこなんと床に座って尻っぽを振っている。
「ウィリーっていうの。よろしくね。」
　危うく踏んづけそうになるのを避けてあたしは少しよろけたけど、ウィリーくんは素早い動きでパッと逃げる。そして、また近寄ってくると、あたしの足にまとわりついてきた。
　あたしはそれを手のひらに乗っけてあげて、その鼻の頭にそっとキッス。
「ウィリーくん。あたし、レイコっていうの。よろしくね。」
　クリクリっとした瞳をキョトンとさせて、あたしと視線が合うとポーッと顔を赤らめる。
　そして･･･。
　やっぱり、ウィリーくんは単なる仔犬ではなかったのよね。顔を赤く染めたウィリーくん、可愛い声で一声鳴いたかと思うと、急に重くなってきたような気が･･･、ううん、本当に重くなってきて、なんとなく大きさも大きくなったような感じ。アッと思った時には、もうあたしの手では支えきらなくなって床の上に落としてしまう。
　それでもドンドン大きくなっていく。既にあたしの背丈を越す勢い。それなのに、ウィリーくん、まだまだ大きくなる。
「ウィリー！やめなさい。やめてよ、基地が壊れちゃうじゃない。ウィリーッたら！」
　ビュレットが今にも泣き出しそうな声で叫んでいるけど、当のウィリーくん、今やこの部屋いっぱいになるほどまで大きくなっている。はっきり言ってビュレットの叫び声などまったく聞こえていない様子。
　あたしは傍らにいたビュレットを抱きかかえると、半開きになっていたドアから通路に転がり出た。サッと振り返ると、今出てきたばかりの部屋の壁がメキメキ音を立てて崩れてきた。
「助けてぇ～！
　基地内に響き渡ったんじゃなかろうかって大声で叫んだ。もうこうなってしまうと恥も外聞もあったもんじゃない。誰でもいいからとにかくこの場をなんとかして欲しい。
　あたしの声が聞こえたのか、それとも壁の破壊音に気が付いたのか、通路の向こうから何人かが走ってくるのが分かった。その中にはサーミンも･･･。あぁ、あの顔は完全に怒っている。
　ビュレットはあたしの腕の中で泣きじゃくっているし、ウィリーくんはまだまだ大きくなるのを止めてくれていないし、ラオコーン基地はいきなりのパニック状態。
　もう、最初からこんな調子じゃあ、あたし、落ち込んじゃうよ。

ＡＣＴⅡ　「FERIA」

S60.10.MAR <<H18.24.SEP>>

ＡＣＴⅢ　「LAOCOON」

　ラオコーン基地のど真ん中、目の前には完全に怒っているサーミン。あたしの声を聞いて集まってきた人たちも、原因がウィリーくんだと分かるや次々と戻って行く。ということは、ウィリーくんのこういう騒ぎはここでは日常茶飯事なのかな。
「本当にごめんなさい。すいませんでした。もうしませんから、いい加減に機嫌を直してよぉ。」
　サーミンは完全に機嫌を損ねちゃった様子で、あたしが何を言っても聞く耳はないらしい。返事すらしてくれる気配がない。なんというか、瞳が心持ち赤っぽく光って、ちょっと恐い感じすらする。
　それにしてもウィリーくんのおかげでえらい目にあったわ。幸いにも壊れた壁はあたしの所までは崩れてこなかったので、あたしもビュレットも大した傷はなかったんだけどね。そのウィリーくんは、真っ先に駆けつけてきたサーミンに怒鳴られた瞬間、見る見るうちに元の大きさに戻って、どこかへ走り去ってしまった。
　結局、ビュレットもウィリーくんの後を追いかけていってしまったので、サーミンの前で謝っているのはあたし一人だけ･･･。あの二人、あとでうーんと叱ってやるんだから。
「ねぇ、本当にごめんなさい。これからは何でも言うことを聞くから、いい加減に許してよぉ」
　サーミンの横でさっきからずーっと傍観を決め込んでいた男性が一人、おそらくこの人がこの基地の隊長のアトリーだと思うけど、この人がようやく見かねて口を開いてくれた。
「なぁ、いい加減に許してやれよ。彼女だってもう十分に反省しているようだし。なっ、そうだろ？」
「え、えぇ、はい。」
　いきなりこっちに振られてちょっと心の準備が･･･。慌ててあたしにとって一番の良い声で可愛く返事を返す。
「せやかて、あれほど動いたらあかんと言うといたんに、あたしが戻ってみりゃオーロラにいないし、どこやと思って捜してみればあの叫び声やろ。ちっこい子どもやないんやし、言われたことくらいきちんと守れんようじゃ、この先本当に困るやないの。」
「まぁ、そりゃそうだけどね。レイコちゃんだったっけ？もうやらないだろ。」
「せやけど･･･。」
「第一なぁ、半年前に同じ理由で怒られた人もいたんじゃなかったっけ？その人だって今じゃ十分に反省しているだろ？」
　アトリーがポンとサーミンの肩に手を置くと、サーミンたら物凄い恐い瞳でアトリーを睨みつける。あっ、もしかして半年前に同じことしたのってサーミンかぁ･･･。
「アトリー、お宅がそんなん性格が悪かったとは知らへんかったわ。その話しは無しって約束やった筈やろ。」
「俺はべつに誰とは言ってないぜ。」
　アトリーったら、あたしの方をチラッと見ながらニヤッと笑う。
「分かったわよ。今日のところは特別に許したるわ。もう、これでええんやろ。」
「サーミン、ありがと。」
「お礼ならアトリーに言うんやね。あたしはなーんも知らんわ。」
「アトリー、ありがとう。」
「どう致しまして。まぁ、こんなんで済んでよかったね。」
　まぁ、なんにせよ助かったわ。それというのもみぃんなこのアトリーのおかげ。幸いにも壊れていた壁は勝手に直るらしくて、こうして話しをしている間にもほとんど元の状態に戻っている。とりあえずは一件落着ってところかな。
　それにしても、この人に以前どっかで会ったような気がすんだけど、それとも知り合いの誰かに似てんのかなぁ。暫くジーッと顔を眺めていたんだけど、どうも頭の中に靄がかかったような感じでよく思い出せない。もしかすると、まだ記憶が完全に戻ってきていないのかもしれない。

　あたしがずーっと顔を見つめているのに気が付いて、アトリーは前髪をかき上げながら苦笑した。
「俺の顔がどうかしたかい？」
　その瞬間、アトリーのピーコックグリーンの瞳がキラッと光って、やっと誰に似てんのか分かった気がした。黒い瞳とピーコックグリーンの瞳じゃ全然違うんだけど、なんとなく優一さんに似ているの。どういう風に似ているのかははっきりと言えないんだけど、雰囲気がすごぉく似ている。そういえば、さっきのああいう言い方も優一さんに似ているような気がする。
「なんかよく分からないけど、こんな所で立って話しをするのもなんだし、あっちでコーヒーでも飲みながらこの惑星のことを説明してあげるからおいで。」
　誰に似ているのかが分かって急に笑い出してしまったあたしを見て、アトリーもつられるようにして微笑みながら歩き出す。サーミン一人だけがまだ恐い顔をしているけど、今は気にしないでおこう･･･。
　アトリーが案内してくれた所は、ドアにオペレーションルームと書かれた広い部屋。グルッと見渡すと四方の壁には何かしらの機械が置いてあって、正面には三面の大きなスクリーン。天井はそれ自体がパネル状に光っていて、とくに照明器具が無いのにとても明るい。あたしは一通り部屋の中を観察し終えると、アトリーの示した椅子に腰を降ろした。サーミンは椅子に座らずに壁に寄りかかって立ったまま。アトリーは私の正面に座った。
　ちょうどアトリーの後ろがスクリーンで、そのスクリーンには地球らしき惑星が映っている。でも、たぶんこれがフェリアなんだと直感的に思った。雰囲気は似ているんだけど、大陸の形があたしの知っている地球のものと違っている。
「よく似ているんだってな、地球と･･･。」
　アトリーはチラッとサーミンを見てからそうつぶやく。あたしはその言葉に対して、精一杯の想いを込めて頷いてみせた。
　スクリーンは次々と違う角度からフェリアを映し出して、そして惑星が二つ並んでいる映像になった。さっきのサーミンの話しからするとあのもう一つがジュールって惑星の筈。で、その向こう側にはやはり太陽が二つ並んでいるように見える。たぶん、あれがザルっていう太陽な訳ね。こうやって見てみると、確かに地球によく似ているけど、でも地球と全然違うというのもよく分かる。
「手前の惑星がフェリア、向こう側の一回り大きいのがジュールだよ。よぉく見ないと間違えるほど似ているだろう。これは他の次元層にあるクロス、思議、イオルスなんかにも言えることらしいんだ。ま、俺自身がこの目で確認した訳じゃないけどね。実際のところとしては、鏡に映って見えている惑星がこのフェリアだと思ってくれていい。どうも、それくらい似ているらしいから。」
　アトリーは今度は悪戯っぽい表情で笑いかけてくる。その笑顔が不思議とこんな非常識さをあたしに納得させてくれる。
「ねぇ、ここがフェリアという惑星で、地球とは遠く離れているということは了解するけど、それだけの距離をどうやって一瞬にして飛び越えたのかってことが、どうやっても理解できないんだけど。」
　あたしの問いに少ぉし困った顔をして、ちょっと考え込んでから口を開いた。
「それは･･･、おそらくだけど、普段は別々の時空間に存在しているそれぞれの惑星が、何かの拍子に重なり合う時があるらしいんだ。その時に大きなエネルギーが加わると時空間に歪みが生じる。その歪みに巻き込まれると、地球からフェリアに転移してしまうということらしい。･･･って、こんな説明で分かるかな？」
「ううん、よくは･･･。」
「だろうなぁ、俺だって実は全然分かっていないもん。いや、やけに詳しい奴が一人いてね。全部そいつが教えてくれたんだ。でも、そいつは地球人なんだよなぁ。」
「あ、ひょっとしてシグマって･･･。」
「へぇ、よく知ってるな、サーミンにでも聞いたのか？」
　アトリーって、あたしが口を開くと最後まで喋らしてくれない。いつもあたしが喋り終わらない内に話し出しちゃうんだから。

「あたし達は言ってないよ。」
　うっ、ずーっと黙ってあたし達の会話を聞いていたサーミンが話しに参加してくれたのはいいけど、まだ言い方が心なし恐い。
「さっきビュレットに･･･。」
「なるほどね。でも、まぁいいさ、そのうち嫌でも分かるようになるよ。なっ、サーミン。」
　でも、サーミンは今度はジロッと睨んだだけで何も話してくれない。どうやら機嫌悪い矛先がアトリーのほうに向いたかもしれない。あたしとしてはその方が助かるけどね。アトリーはそんなサーミンの態度にちょっと肩をすくめてみせて、スクリーンの映像を別のものに変えた。
「次はこの星系の話し。」
　スクリーンにはザル星系を真上から見たような図が表示されている。
「レイコちゃんも既に聞いたと思うけど、この星系には恒星が三つあるんだ。つまり、レッドザル、イエローザル、グリーンザルと呼ばれる三恒星の総称としてザルという名称が使われているって訳。」
「ねぇ、三恒星って言ったけど、恒星同士がそんな近くに位置しているなんてちょっと変じゃない？」
　そう、たしか理科の時間にそんな話しを聞いたような気がする。あたし達の太陽だって、一番近い恒星までは何光年も離れている筈なんだ。
「昔は一つだったって説もあるよ。でも、理由はどうであれ現在は三つだし、三つとも恒星であることも間違いない。で、その三つのザルがジュールの影に隠れたり、フェリア自身の影に入ったり出たりして、フェリア上からは常にどれか一つしか見えないことになっているんだよ。」
「せやけどな、一年に一度だけ、正確に言うと１８３日に一度だけ、フェリアから三つのザルが同時に見える日があるんよ。」
　いつの間にかにたっていた筈のサーミンが椅子に座っている。瞳を見る限りじゃ、もう怒ってないみたいだけど･･･。
「アトリーの言ってることは理屈に合わんことばっかりやけど、ここはフェリアであって、地球での物理法則やらは通用せんと思うて間違いないんよ。」
「うーん、それはなんとなく分かるんだけどぉ･･･。」
「いいんだよ。どうせこの次元空間だけの特殊な法則なんだろうから。まぁ、本当のところは誰にも分かっていないということなんだけどね。」
　サーミンが喋っている間に誰かとインターフォンで話していたアトリーが、またもやあたしが喋り終わらないうちに会話に割り込んできた。
「それで、次はジュールとフェリアね。」
「ねぇ、なんでフェリアでは生物らしきものを見かけないの？」
　そう、これはさっきからずーっと感じている違和感の一つ。オーロラでここまで来る途中だって、見たのはかろうじて背の低い雑草だけ。動物や鳥なんかは全然見なかったのよ。
「いないこともないんだけどね。ただ、この辺は北だからあまりいないかな。南の方に行くと海があるんだけど、そこに行けば何種類か水中の生物がいるよ。」
「どういうこと？」
「フェリアにはもともと生物がいなかったんだ。最近になって多次元空間から転移してきた生物で、水中で生活する生物と植物の一部だけがここに順応したらしいんだ。」
「じゃ、アトリーたちは？」
「俺たちは正確にはジュール人なんだ。ジュールからここに移住してきたんだよ。」
「なんで？」
「人間が人間らしく生きるために。」
　それまで絶えず笑顔だったアトリーの顔から笑いが消えて、深い寂しさ･･･ううん、哀しさのような表情が浮かんでいる。
「人間らしく･･･って？」
「なぁ、レイコちゃん、緑と光に囲まれた美しい惑星が、僅か十年で効率を最優先するコンクリートに固められただけの機械都市になったなんて信じられるかい？まぁ、信じられないだろうな。でも、現実に現在のジュールで起きていることなんだ。」

　アトリーはいきなり立ち上がると、オペレーションルームの中を歩き始めた。
「今から１００年ほど前、自然豊かなジュールにも機械文明の明かりが灯ったんだ。それまで機械なんて見たこともなかったジュール人はあっという間にその便利さに心を奪われ、我先にと機械を広めていったんだ。しかも、我々は機械の恐ろしさ、文明の恐ろしさというのを何も知らずにあらゆる場面で機会に依存し過ぎてしまった。そして、約６０年前に都市コンピューターが作られると、人は次第に人間らしさを失い、逆にコンピューターに操られるジュール人まで出てきてしまった。我々は完全に文明の使い方を誤ってしまったんだ。でも、そんな中でも人間本来の心を忘れずにコンピューターの支配が届かない場所に逃げた人々がいた。それが俺たちの親なんだ。俺たちの親は、それまでの機械文明をすべて捨てて昔のジュールの姿に戻そうとしていたんだよ。」
　アトリーはここで一息ついて、また椅子に腰掛けた。
　あたしは、アトリーが話している間中ずーっとスクリーンに映っているフェリアを見ていた。
「ところがだ、２１年前に一人の地球人科学者がジュールに転移してきて情勢がまた変わってしまった。それまで架空のものでしかなかった筈のグランドコンピュータをその地球人が作ってしまったんだ。コンピューターの名前はトリプタン。こいつのせいで、攻撃の魔の手が頻繁に反体制勢力にまで及ぶようになってしまった。大勢いた仲間も次第に少なくなってきて、フェリアに移住してきた時には６人にまで減ってしまったんだ。」
　最後の方の言葉は、かなり辛そうに絞り出している感じ。
「でも、なんで･･･。それならフェリアに移住した段階で、アトリーたちがそのトリプタンというコンピューターと戦う理由なんて無くなったんじゃないの？」
「奴はジュールごと外宇宙に飛び出そうとしたんだ。おかげで危うくこの星系を丸ごと崩壊させるところだった。」
「どうして、コンピューターなんだからそれくらいは計算できる筈じゃないの？」
「奴はただのコンピューターじゃないのさ。奴は自我を持っている。しかも支配欲まで持っているんだ。ある意味人間臭いコンピューターだと言えるかもしれない。もはや普通の人間には手の負えない化け物だよ。」
　信じられない、そんなコンピューターが存在していること自体が･･･。それよりも、そんなことが可能という方が驚きかもしれない。
「回路の故障か、プログラムのミスなのか、それとも誰かの人為的なものなのか、俺たちにも何も分かっていない。しかし、今となってしまってはとにかく奴の機能を早く停止させないと、このフェリアだけでなく対称位置にある地球やイオルス、クロス、思議などの他次元の惑星まで時空の波に飲み込まれることになるかもしれないんだ。」
　これがちょっと気の利いた冗談なら、鼻先でフンッとか言って笑ってみせるだけの器量をあたしもあると思っているんだけど、どうやらあたしは夢を見ているんでもなく、冗談を聞かされているんでもなく、あたしの目の前にあるのはおそらくは全部真実。心臓がドキドキしているのを感じる。喉がカラカラになって息をするのも辛い。
　何ということはなしにサーミンのほうを見ると、向こうもあたしのことを見ていて、ちょうど目が合ってしまった。そして、やっぱりあたしを凝視しているアトリーの視線とも合う。
　そして、三人同時に溜息･･･。
　参ったなぁ、あたしの人生の中で最大級の厄介ごと。たぶん断言しちゃって間違いないと思う。
「アトリー、話しは終わった？」
　不意に後から女性の声が聞こえてくる。反射的に振り向くと、タイミングよく湯気の立っているティーカップをお盆に乗せた女の子が部屋の入り口に立っている。
「うん、ちょうどよかった。」
　女の子は軽く会釈をしながら近づいてくると、あたしの前のテーブルにティーカップを並べながらクスッと笑ってまた部屋を出て行った。
「まぁ、以上のことを頭に入れておいてくれれば、とりあえずは大丈夫だと思うよ。あとはその都度覚えていけばいい。」
　サーミンが注いでくれた紅茶を受取りしたものの、あたしは猫舌なのでしばらくスプーンでかき回しながら、アトリーの言葉になんとなく頷く。

「それから、ここもゼウスもコンピューター要塞ではあるけど、この二ヶ所だけはトリプタンの影響は受けていないから、それだけは安心していいよ。今日はこんなもんかな。」
　それまでずーっとあたしを見ていたアトリーの瞳が、チラッとサーミンの様子を窺うように動く。
「ま、こんなもんやろ。せやけど、一番大事なことをまだ言うてないな。」
「分かっているよ。だから、そんな顔で睨むな。ショウに言い付けるぞ。」
　あっ、サーミンの表情が微かだけどたしかに変わった。ふーん、なるほどねぇ。ショウさんというのがどんな人かは知らないけど、あたしもいざっていう時にはこの手を使お。
「で、その一番大事なことって？」
「うん、それなんだけど、レイコちゃんに頼みがあるんだよ。えぇと･･･。」
「アトリー！」
　なぁんか言いにくそうなアトリーを急かすようにサーミンが立ち上がった。
「ちょっと待てって、いま言うからさ。えぇと、あのな、おそらくはこの惑星にいる限り、トリプタンとはどうしたって対立せざる得ないだろうし、レイコちゃんをこの戦いに巻き込みたい訳じゃないけど、俺たちとしても一緒に戦ってもらえると助かるかなと･･･。」
　なによぉ、この歯切れの悪い喋り方。アトリーが何を言いたいのかはさっきから大体の察しは付いているんだ。だけど、それをあたしの方から言い出すことはしたくない。
「だからぁ、つまりぃ、できればぁ･･･。」
　アトリーったらだんだん声を大きくしていくけど、話しの方はまったく先に進む気配がない。なんとなく、聞いているこっちの方が辛くなってくる。
「アトリー、もうえぇよ。お宅に任せとったら何時間あっても終わらんね。」
　サーミンが見かねてついにアトリーの言葉をさえぎった。
　反射的にあたしは身構える。アトリーなら遠まわしにくるけど、おそらくサーミンは直に結論を言ってくるに決まっている。今のあたしにはまだ聞きたくないその言葉を･･･。
「レイコ、アトリーの言いたいことは、あたしらと一緒にトリプタンと戦ってほしいってこと。今すぐに返事をしてほしいって訳やないけど、トリプタンをこのまま放っておいたら、地球も遠からず破滅するってことを忘れんといてな。」
　やっぱりこういう展開な訳？なんとなくこういう風に言われるのって、あのドラ焼き円盤に襲われた時から予想していたんだよね。でも、だからといってやっぱり即答はできない。
　ねぇ、どうしたらいいんだろ。桂木さんならこんな時、あたしに何て言ってくれる？
　うーん、あたしは考えた。とにかく何か言いたくて。で、考えて、考えて･･･。嫌だ、なんか目が回ってきた。あたし、知らなかったわ。考えすぎると目が回るなんて。視界が暗くなってくる。遠くの方から赤い光が近づいてくるのだけが見える。
　あたしは不意に何もない空間に立っていることに気が付いた。たった今までもオペレーションルームでアトリーの前に座っていた筈なのに、なぜか立っていて赤い光が近づいてくるのを待っているのだ。赤い光はあたしの前まで来ると停まって、ユラユラとその場で揺れている。不思議なことに不安感はなく、むしろその赤い光が何であるのか昔から知ってるかのような懐かしさすら感じる。
「鈴子チャン！」
　どこからか小さい男の子の声が響いてきた。
「だぁれ、誰なの？」
「僕ハラオコーンノサブコンピューター。鈴子チャンガ来ルノヲズット待ッテイタンダヨ。」
「ちょっと、それはどういう意味？」
「鈴子チャンハ、ズット昔カラココニ来ルコトニナッテイタンダヨ。コノ惑星ニトッテ必要ナ人ダカラ。」
　赤い光は声に合わせて上下左右に動き回る。
「どうしてなの？」
「コノ戦争ハワザト創ラレタ物ダカラネ。停メルコトガ出来ルノハ、鈴子チャン、アナタダケナンダヨ。」
「それじゃ分からないわ。なぜわざと戦争を起こさなきゃいけないの？」

「人間ノタメ。人間ガ人間ラシク生キルタメ。」
　人間が人間らしく生きるため。それはさっきアトリーが言った台詞じゃない。
「じゃあ、誰がこの戦争を起こしたの？」
「･･･。」
「どうしたの？答えなさいよ。」
「回答不可能･･･。」
「なんで答えないのよ。ラオコーン！」
　あたしが赤い光に向かってそう叫んだ瞬間、暗闇だったあたしの周囲を一転して白い光が包み込んだ。
「娘よ、やがてお前はすべてを知る事になる。今はまだその時期ではないのだ。娘よ、この宇宙を救えるのはお前しかいない。戦うのだ。」
　重々しい声。今までの子どもっぽい声とは明らかに違う。絶対者、そんな言葉がピッタリくるような声。
　あたしはその声のする方向に向かって、ゆっくりと、そして力強く頷いていた。
「レイコ！」
　いきなりサーミンが抱きついていた。
「あれっ？」
　顔を上げるとそこはオペレーションルームで、アトリーが呆然とあたしを見ている。
「レイコ、だい･･･丈夫？」
　サーミンが不安げな面持ちであたしにゆっくりと問いかける。
「うん、べつにどこも･･･。ねぇ、あたし、どうなっていたの？」
「どうなってたやないよ。突然レイコの姿が消えたと思うたら、今度はラオコーンがおかしゅうなるし、もう何がなんだか。」
「俺は次元の裂け目に巻き込まれたのかと思ったよ。いや、とにかく無事でよかった。」
　つまり、ラオコーンによって別の空間に連れて行かれていた後、再びここに送り戻されたってことかな。
　だけど、さっきのあの声、あれは誰だったんだろ。ラオコーンの声と違ってコンピューターって感じじゃなかった。戦え･･･とか言ってたけど、なんか、こう身体の底から力が湧いてくるような感じ。
「あたし、決めたわ。」
「えっ？」
「決めた！アトリー、あたし、やるわよ。ラオコーンが言ったの、この戦争を停められるのはあたしだけだって。それに、あたし自身、自分に何が出来るのかそれを知りたくなってきた。ねぇ、今度はあたしの方から頼むわ。どうか一緒に戦わせてください。」
　あたしはアトリーとサーミンに向かってきちんと頭を下げた。こういうのっていい加減に宣言するものじゃないと思うし、どういう訳だか不思議とさっきまでの不安や恐怖心が消えていて、こうする方がすべてうまくいくという感じがしている。あとはただ自分の可能性を信じるだけ。
「そ、そうか、ラオコーンが･･･。うん、大歓迎だよ。こちらこそよろしく頼むよ。」
「あたしも･･･。せやけど、ほんとにええんの？」
　アトリーもサーミンも、二人して目を丸くしてあたしの顔を見つめている。
「嫌だなぁ、そんな顔しなくたって平気よ。べつに自暴自棄になって言ってる訳じゃないの。本当に戦ってみせる自信があるのよ。どうしてなのかはあたしにも分かんないんだけどね。」
　正直な話し、ラオコーンを倒すというよりもこの戦いを終わらせるって気持ちの方が強く湧き上がってくるのを感じる。おそらくはそれがあたしに課せられた運命なのだろうと思う。
「それならいいけど･･･。」
　それでもまだサーミンは腑に落ちないって様子だけど、まぁそのうちに分かってくれるでしょ。
　アトリーもサーミンも深い溜息をついて腰を降ろした。あたしも手近な椅子を引き寄せて腰掛ける。
「まぁ、いいさ。ところで提案なんだが、レイコちゃん、暫くこっちで預かりたいんだけど、どうかな？」

「ん、あたしはどっちでも構わないわよ。どっちかと言うとそれはサーミンに訊いてよ。」
　アトリーは恐る恐るといった感じでサーミンのほうにゆっくりと振り向く。
「アトリー、お宅、何を企んでいるんや。」
「べつに何も･･･。ただ、ちょっと気になることがあってね。」
　サーミン、ジーッとアトリーの顔を見つめて、それから不意にニコッと笑った。
「まぁ、構へんけどな。ショウにはあたしから話しとくわ。せやけど、レイコにもしものことがあったら、ただじゃあ済まさへんからね。」
「分かっているって、無理は絶対にさせないさ。ただ、レイコちゃんの能力、お宅の能力なんて遠く及ばないほど、強力なんじゃないかってね。俺の身勝手な憶測だけど。」
　サーミンはちょっと首を傾げて、あたしの顔をチラッと見た。うん、サーミンの笑顔、最高に可愛いよ。
「了解。あたしもそう思う。じゃ、あたし、ゼウスに戻るわ。あ、レイコ、ちょっと。」
　話しながら立ち上がり、オペレーションルームを出たところで急に引き返してきたサーミンが、手招きをしてあたしを呼んだ。
　なんだろ、なんとなくアトリーの前じゃ話せない様子なんで、とりあえずサーミンの後について外に置いてあるオーロラの所までやってきちゃった。
「なんなの？アトリーに聞かれたくないことなの？」
「ちょっとね。アトリーは手が早いから気ぃつけなあかんよって注意しようかと･･･なぁんてね。ま、冗談はおいといて、本当はこれを渡しときたかったんよ。」
　ポケットからペンダント状の物を出して、それをあたしの首にかけた。直径５センチくらいで真ん中にルビーみたいな石がはめ込んである。なんとなく直感で通信機のような気がした。
「これ、もしかして通信機？」
「ん、そんなもんと思ってくれてればええよ。どんな時にでも身に付けてて、なんかあった時にはその赤いボタンを押してくれれば、それで十分やから。んじゃ、くれぐれもアトリーには気ぃつけるんよ。」
　ニコッと笑って、軽く右手を振りながらオーロラに乗り込んだ。
「サーミン！」
「じゃあね。」
　サーミンは笑いながらオーロラを発信させた。オーロラの姿は見る見るうちに砂漠の中に小さくなっていく。空にはまた別のザルが輝いていて、ライトグリーンの太陽光が目にとても眩しいや。遠くに小さくなっていくオーロラをぼんやりと眺めたまま、あたしはその場に座り込んでジャンバーのポケットから最後のラークマイルドを取り出した。
　そういやぁ、いつのまにかかなりの記憶が戻ってきていることに気がついたんだよね。少なくとも日常一般のことについては全部。ただ、どうしても思い出せないことがあるような気がして、それがずっと気になっているけど、とりあえずは気分もいいし考えないでおこ。
　それに嫌なものが目の前を横切ったしね･･･。
　いつからだろ、さっきからウィリーくんがあたしの前を何度も駆け抜けているのよね。初めのうちは無視していたんだけど、こう何度もやられると無視できないじゃない。いい加減、ウザったくなって怒鳴りつけようとした途端、ビュレットがしょんぼりした顔でゆっくりと歩いてきて、あたしの前で止まった。
　あたしはわざとそ知らぬ顔でビュレットに訊いてみた。
「どうしたの？」
「うん･･･。」
「さっきのことなら、ビュレットは気にしなくたっていいわよ。」
「でもぉ･･･。」
「でも、なぁに？」
「あのぉ、ウィリーのこと、嫌いになっちゃった？」
　あぁ、ようやく何が言いたいのか分かった。なるほどね、あたし、こういう子ってだぁい好き。だけど、ビュレットにはわざと困らせるような言い方をしちゃお。
「うーん、少ぉし嫌いになったかな。」

　うわぁ、ビュレットの大きい瞳から今にも涙がこぼれ落ちそうになる。ウィリーくん、そんな気配を察してか、あたしの足元に擦り寄ってきた。あたしはちょっとかがんで、ウィリーくんの鼻の頭を撫でてやる。
「でもね、君は嫌いになるには、あまりにも可愛すぎるのだよ。まったく、さっきは本当に驚いたんだからね。」
　ウィリーくん、分かってんのか分かってないのか、あたしの手の上で大きなあくびをしている。
「でもさぁ、あたしとしてはどうでもいいんだけど、ビュレットが気にしちゃうっていうなら、あたしの身の回りの世話をやってくれないかなぁ。ねぇ、お願いできる？」
「やる！やります。あたし、何でもやります。」
　思ったとおり、やっぱり元気になった。でも、この必死の形相、すさまじいほどの迫力があるわ。よっぽど気にしていたみたい。
「んじゃ、まず手始めにあたしの部屋に案内してくれる？」
「うん、任せといて。」
　大きく頷くと、笑顔を、これ以上ないってくらいの笑顔を見せて駆けていく。あ、転んだ。まったく、ビュレットったら･･･。
「ビュレット！どこに行ったのかと思ったら、またこんな所で遊んでいるんだから。アトリーに怒られるわよ。早く部屋に戻りなさい。」
「遊んでなんかいないよーだ。レイコお姉ちゃんを部屋に案内するんだもん。」
　えーっと、さっきお茶を運んで来てくれた子。なんて名前だったっけ？
「ユウ、自己紹介しなよ。」
　ユウと呼ばれたその子は、あたしの姿を見つけるとすんごく可愛くお辞儀をした。
「あ、あの、あたし、ユウと言います。レイコさん･･･でしたよね。」
「うん、森柄鈴子って言うの、よろしくね。年齢は同じくらいかな？あたし、２３だけど。」
「あの、二つ年下です。あたしは２１ですから。」
「ふーん。」
　あたしより二つ年下とは思えないほどユウは大人びて見える。やっぱりスタイルの差かなぁ。でも、それにしたって妙におどおどしているのが気にかかるんだけどね。
「ねぇ、そんなに構えなくても大丈夫だと思うけど。」
「べ･･･べつにそういう訳では･･･。あの、すいません。」
「ちょっとぉ、なんでそこで謝っちゃうのよ。ま、いいけどね。あっ、それから、あたしのことを呼ぶのにいちいち『さん』付けなんかで呼ばないでいいからね。なんかそういうのってこそばゆくて。」
「あ、はい、そうします。あの、じゃ、基地の中を案内します。さっきはどうせウィリーのせいで何も見られなかったでしょうから。」
　どうやらこの子はとても人見知りするタイプみたい。ビュレットに対している時とあたしと話す時で思いっきり雰囲気が変わる。マリンブルーの大きな瞳を持っていて、あたしがこれまでに会ったどんな子よりもあたしの心を惹きつける。ほら、よく女の子が集まってボーイフレンドのこととかファッションのこととかをキャアキャア騒ぎながら喋っているところに加われなくて、輪の外側でそれをジーッと見ているようなそんな子。だけど考え方は妙に大人っぽくて、誰からも好かれるような感じ。
　なんて表現すればいいのかな、女のあたしが言うのも変なんだけど、あたしの理想の中に住んでいるような素敵な女の子。あたしが男だったら間違いなく一目惚れしているかもしれない。
　いつの間にかビュレットはウィリーくんとじゃれていて、ユウの言った事などすっかりと忘れているみたい。まぁ、さっきみたいに落ち込まれるよりこっちの方がいいけどね。
「ねぇ、どうせナンバー５のフリールームに入るんでしょ。あたし、先に行って用意してっからね。」
　そう言ったかと思うとウィリーくんを従えてあっという間に基地の中に駆けていく。なんとなくそれを見送りながら、ユウとあたしは互いに顔を見合わせた。
「あたし達も行きましょうか。早く行かないと今度はビュレットが怒り出しますよ。」
「うん。」

　ユウは素敵な笑顔をあたしに見せて基地の中を手で指し示す。あたしはそれに見惚れながら合わせて歩き出した。メディカルルーム、レーダールーム、格納庫、次々と案内してくれるのはいいけど、さっぱりと覚えられないままナンバー５と書かれたドアの前に到着した。
　ドアは少しだけ開いてて、その隙間から中を覗くとウィリーくんがすぐに気がついてチョコチョコとあたしの足元に擦り寄ってきた。基地の外では大丈夫だったのに、今度はさっきの恐怖が甦って反射的に後ずさりしてしまった。もう大きくなるんじゃないわよ。
　ベッドルームに三人と一匹が入るといささか狭い気もしないでもないけど、たぶんこの部屋に一人で生活するには十分すぎるほど広い。いや、広すぎるかもしれない･･･。だって、普通のリビングの他にベッドルームがあって、キッチンとシャワールームまで付いているんだもん。
　あたしの住んでいたアパートって六畳の一間に台所があるだけの安アパートだったのに、なんか急に待遇がよくなってかえって悪いことしている気になる。
「この基地の構造はだいたい分かりましたか？」
　ユウがベッドの脇に小さい椅子を持ってきながらあたしに訊ねる。ビュレットはウィリーくんとベッドの上ではしゃいでいる。その様子を横目で見ながらあたしは首を横に振った。
「ぜーんぜん、なんでこんな迷路みたいな構造しているのよぉ。」
「お姉ちゃんの物覚えが悪いだけじゃないの。ドアに部屋の名前が書いてあんだからすぐに分かるでしょ。」
「ビュレット、そんな耳元で喚かなくたって聞こえているわよぉ。」
　まったくぅ、ビュレットの声ってキンキン声なんだから。こんな耳元で喋られたら耳がおかしくなっちゃうじゃない。」
「それに、あたしって、自慢じゃないけど先天的な方向音痴なんだもん。地図の上なら間違えないけど、実際に自分で歩くと必ずっていいほど道に迷うのよ。」
　これには本当にすごい話しがあって、前にアパートに初めて見にきた時、行きは不動産屋さんに案内してもらった道を、帰りは地図まで貰ったのに思いっきり迷い、その結果目指す駅は見つからず、５時間もかけてたどり着いた所がなんと目的の駅から七つも離れた隣の市だったという離れ業をやってのけたのだ。
　他にもちょっとした迷子ていどの話しなら数え切れないほどやっているし、こうなってくると単に物覚えが悪いくらいじゃ済まないような感じなんだわ。
「大丈夫よ、ここではあたしがついててあげるから。」
「ありがとう。でも、その方がもっと不安だったりして。」
「お姉ちゃん！それ、どういう意味よ！」
　ビュレットは顔をプクーッと膨らませて、目いっぱい拗ねてみせる。だから、耳元で喚かないでってばぁ。
「でも、割と簡単に覚えられると思いますよ。ちょっとしたコツさえ掴んでしまえばね。」
「コツって？」
　ユウはどこからかペンと紙を出してくると、簡単な基地の略図を書いてくれた。そして、その書きあがった略図の上に別の色で螺旋状の線をスーッと引いた。
「こうすれば分かりやすいでしょう。中央にオペレーションルームがあって、そこから順に、フリールーム１、特別ルーム、フリールーム２というように螺旋状に並んでいるんです。これだけ頭に入れておけばかなり違いますよ。」
「でもねぇ･･･。」
「えぇと、それに特別ルームの前の通路には淡いブルーのラインが引いてありますから、それも目印にするといいと思います。」
　そう言って略図の上に青いペンで斜線を入れてくれた。
「大丈夫かしらね･･･。」
「大丈夫ですよ。それに一度覚えてしまえば、ゼウス基地の構造も同じですから楽になりますよ。」
　うぅ、どうせ螺旋状に部屋を並べるんなら、素直に通路もそうしておいてほしかった。何が不安と言ったって、たしかに部屋は螺旋状に並んでいるんでしょうけど、通路はそれとはまったく関係ないという点。まぁ、あたしがここで文句を言ってもしょうがないけどね。

「他に先に説明しておくことってありますか？」
　えーっと、あーそうだ！
「えーっと、ほら、一応これから戦ったりすることになるんだろうから、この基地の戦力なんかは知っておきたいかな。」
「えぇ、そうですね。そのことならアトリーから説明しておくようには言われています。」
　頷いたユウの前をウィリーくんが横切る。さっきからウィリーくんは部屋の中をチョロチョロと動き回っていて煩い。しかも、いま気が付いたけど、この子飛べるのよね。顔の周りでチョロチョロ飛び回られたら、とてもじゃないけど煩くてたまんない。
「まず、この基地はアトリーも言ってたと思いますけどコンピューター要塞なんです。いつ頃、誰が何の目的で建設したのかは何も分かっていません。あたし達がここに来た時にはもう既にここにあったんです。」
「コンピューター要塞っていうくらいなんだから、コンピューターに聞けばいいなじゃないの？」
「駄目なんです。ラオコーンの記憶バンクのほとんどがロックされているので、あたし達には全体の 10 パーセントくらいしか情報を引き出せないんです。それに、あたし達が通常利用しているのはラオコーンのサブシステムだけで、メインシステムの回路はロックが解除できないままなんです。」
　そういやぁ、あの時のコンピューターの声、サブコンピューターって名乗ったっけ。あたしがちょっと考え込んでいると、どうやら言うことを聞かないウィリーくんにビュレットが怒り出して、チョロチョロと動き回っていたウィリーくんの首っ玉を掴むと、そのまま外に連れて行ってしまった。
　ユウはそれも気になるという顔つきで、そのまま続きを話し始めた。
「この惑星に来た時、あたし達は６人いました。ある人のおかげでラオコーンを基地として使えるようにして少し落ち着いた頃でしたか、あたし達は一人の少女に出会ったんです。その少女は不思議な犬を連れていて、まるでこの惑星の妖精みたいでした。」
「それがビュレットって訳？」
「えぇ、そうです。あたし達はそれ以来、自分達のことをフェリア人と言っています。でも、本当のフェリア人は彼女なのかもしれません。」
　ユウがなんとも言えない不思議な笑顔を作る。それを見てあたしは思わず絶句してしまう。どんな言葉をかけたらいいか、それすらも見つからないような表情を見せるんだもん。
　ちょうど空いていたベッドの上に思いっきり弾みをつけて身体を投げ出した。その勢いにユウの表情がふとわれに返る。
「あ、すいません。なんかボーッとなっちゃって。」
「ん、構わないよぉ。で、この基地って何人くらいいるの？」
「えぇと･･･６人です。」
　６人かぁ･･･なんかおかしいな。あたしはゆっくりとユウの説明を心の中で反復してみる。
「ねぇ、ジュールから来た時って６人だったんでしょ。だったら、ビュレットが増えて７人じゃないの？」
「実は一人行方不明なんです。ですから、ビュレットを入れた６人とウィリー、それにロボットのポル。これが現在のラオコーンの全住人です。まだ会ってない人については、明日以降にでも会った時に紹介していきますね。」
　さっきウィリーくんを連れて出ていったビュレットが３人分のジュースを持って戻ってきた。
「ユウ、アトリーがラムダ計画の作戦会議は明日やるってよ。」
「そう、分かったわ。ありがとう。」
　ラムダ計画･･･？
「なんなの？」
「えぇ、あ、でも、あとで説明しますね。その前にラオコーンの戦力を覚えてもらわないと、少し話しが横道に逸れてしまいましたから。」
「ん、オーケー、じゃ、そうしよ。」
　パッと身体を起こすと、ベッドの縁に座りなおした。

「えぇと、まず小型戦闘機アルテミス、これが２機。それから、大型戦闘艦スラッグ。戦闘バギーのヘルメス。それにサンドスクーターが５台。これがラオコーンの現在の戦力です。
「そ、そう･･･。」
「あ、それからゼウスのほうも一緒に言うと、アルテミスが３機。三つに分離して色々な戦闘態勢が取れるフェイテス。先ほどサーミンと一緒に乗ってきたオーロラ。それにヘリコプター。最後に要塞艦ゼウス。これで全部です。アルテミス以外は大気圏内の戦闘には不利ですけど、必要な時は自由に使ってくださって結構です。もちろん、アトリーには許可を取って下さいね。」
「う、うん。」
　ぐわぁん、こんなもん一気に覚えられる訳ないわよぉ。あたし、昔っから名前を覚えるのって苦手なのに。ま、とりあえずオーロラだけでも覚えておくことにしよ。
「ねぇ、悪いけど、あとで紙に書いてくれないかな？」
「えぇ、いいですよ。」
　ユウったらクスクス笑っちゃってぇ。でも、まぁ、やっぱり笑うか。まったくぅ、ビュレットなんて、あたしは関係ないって感じでベッドの上を転げまわっているし、これじゃさっきのウィリーくんと変わらないじゃない。
「ところでさぁ、さっきのラムダ計画って何なの？説明して貰えるんでしょうね。明日になって一人だけ蚊帳の外なんてぇのは嫌ぁよ。」
「え、えぇ、あの、先ほどの補足にもなるんですけど、ここにいる６人とゼウスの４人、この１０人の他にもトリプタンと戦っている人たちがいます。まぁ、一匹狼を気取っている人たちなんですが、そういう人が３人いまして、それぞれシグマ、ラムダ、クシィというコードネームで呼ばれています。その中のラムダが、この前あたしたちの協力を要請してきたんです。」
「つまり、対トリプタン用の戦闘計画書を持ってきたんで、それを検討しようって訳ね。」
「えぇ、そうです。それで協力するか、しないかを明日決定することになっているんです。」
「ふーん。」
　なるほどねぇ、そんな人たちがいるのか。でも、なんかおかしいわ。３人の名前を聞いた時、まぁシグマは別としても３人の名前は初めて聞いた筈なのに、それなのにすごく心のどこかに引っかかるって感じがする。少なくとも誰か一人はあたしと重要な関係が出てくるような気がするのよね。もしかすると、まだ完全に思い出していない部分に何かそのヒントがあるような気がする。
「どうかしましたか？」
「ん、いや、なんでもないわ。」
　そうだよね、今はこんなことに気を使っている場合じゃない。でもぉ･･･。
「ねぇ、その３人ってどんな人たちなの？」
「えっ、あの、あたし、実はあまりよく知らないんです。いつもあたし達が危うくなると加勢してくれるんですけど、どこにいるのかも分からない不思議な人たちなんです。でも、もし、もっとよく知りたいのでしたら、アトリーに聞いたほうがいいと思いますよ。」
「えっ、いや、いいの、ちょっと聞いてみたかっただけだから。」
　慌てて断ってしまったけど、嫌だなぁ、なんか余計にその３人に会いたくなってきちゃったわ。
「その３人は会えない･･･わよねぇ。」
　いけない！思わず口に出して言ってしまう。
「えぇ、たぶん。でも、もしかしてラムダでしたらこの計画の起案者ですから、この基地に来るかもしれませんね」
　うぅ･･･、ありがと。真面目に答えてくれるユウには感謝しても感謝しきれないかも。
「あ、でも･･･、まぁ、会えたらでいいか、それに･･･。」
「それに？」
　それに肝心の引っかかっている何かが思い出せなきゃ、ひょっとしたら会ったとしても何も意味ないかもしれないもん。下手に期待なんかしない方がいい。
「ううん、なんでもなぁい。ありがとね。」
　ユウったら、あたしの態度が急に変わったので目をパチクリさせている。仕方がないか、あたしも今そう思っているもん。

「ねぇ、そういやぁ、今はいったい何時なの？この腕時計、転移のショックでおかしくなっちゃってさぁ。あ、でも、この惑星って２４時間制じゃないとか？」
　適当にごまかしたつもり･･･だったんだけどなぁ。なによぉ、ユウったらいきなり人の顔をみて笑い出したりして。あたし、なんかまずいことでも言ったかしら。
「どうしたの？」
「だ、だって･･･。」
　駄目だわ、こりゃ。涙を流しながら笑っているんだもん。一所懸命に喋ろうとはしているんだけど、もう何を言っているのか分かんない状態。
　ビュレットなんかは運が悪いというのかタイミングがいけなかったと言うべきか、ちょうどジュースを飲んでいる最中だったもんで、むせてベッドの上で笑いながら苦しんでいる。
「ねぇ、どうしたのよ。」
「だ、だってぇ、ゴホッ、ゴホッ、お姉ちゃん、みんなと同じことを言うんだもん。」
「へっ？」
「あの、あのですね･･･。」
　ユウがようやく顔を上げた。でも、まだ笑っている。
「ショウやサーミンがフェリアに来た時にも、やはり一回はその台詞を言ったもので。」
「それだけで、なんでそんなに笑うのよ。」
「すいません。でも･･･。」
「でも？」
　あたしは改めてユウの顔を見つめなおした。
「お姉ちゃん、この惑星って時間っていうものが無いのよ。」
「時間がない？」
「というより、時間という概念が無かったんです。ジュールもフェリアも自転していないのが原因ですけどね。」
「自転していない？」
　ちょっとぉ、なんかよく知らないけど頭の中が豆腐の根性になってきた。なんでコンピューター文明を築いたような惑星で、時間という概念が存在していないのよ。そんな莫迦な･･･。
「大丈夫ですか？」
　あたしの顔つきで察したのか、ユウが心配そうな顔であたしの顔を覗き込む。
「大丈夫じゃないわよ。なんで時間が無いのかちゃんと説明してよ。」
　べつに必要もないのにあたしったら怒っている。ユウは意味のないあたしの迫力に怯えて、少しずつあたしから遠ざかっていく。
「えぇ、ですからね･･･。」
「いいわよ、今度はあたしが説明するわ。」
　ビュレットがユウの言葉を遮ると、ベッドの上からピョンと飛び降りてあたしの正面に立った。
「お姉ちゃん、さっきサーミンとここに来た時、レッドザルとイエローザルが交代したでしょ。あれが一日に３回あるんだよね。ジュールの方だともっと複雑なんだけど、とりあえずフェリアについて言うと、その３回の起こる間隔っていうのがあまり規則正しくないの。だから、この惑星には基準になる時間がないのよ。」
「ふーん。」
「でも、今は違うわよ。ショウの持ってきた時計を基準にして、ちゃんとフェリア時間ってぇのを作ったんだからね。ねっ？」
「えぇ、そうです。」
　ユウがホッとした顔でようやく微笑んだ。
「グリーンザルが沈んでから、またグリーンザルが沈むまでを一日として、その平均を１２等分したものが地球での一時間とほぼ同じなんだそうです。」
「つまり、地球時間の約１２時間がフェリアでの一日って訳ね。」
「はい。」
　ふーん、つまりぃ、ここでの二日間っていうのが地球での一日になる訳ね。なぁんとなく得した気分。

「で、今は何時くらいになるの？」
「えぇと、グリーンザルが出てきたばかりですから、たぶん９時頃だと思います。」
　自分の腕時計を見ると、デジタルは２０時４７分を示している。なるほどね、べつに狂っていた訳じゃないんだ。
「あのさぁ、悪いんだけど、あたし、少し眠るわ。時差ボケだ何だか分からないけど、さっきからやたらと眠くなってきたのよね。」
「えぇ、きっと疲れたんですよ。」
「あ、それからさぁ、シャワーって使える？」
「え、えぇと･･･、はい、今だったらお湯も使えますよ。それじゃ、あとで起こしに来ますね。」
「ん、頼むね。」
　あたしはフラーッと立ち上がる。
「じゃ、お姉ちゃん、またあとでねぇ。」
「では、おやすみなさい。」
　ユウたちが部屋を出て行った後、よろけるようにしてバスルームに飛び込んだ。汗でべったりしていただけに、冷たい水がとても気持ちがいいや。だけどぉ、シャワーを浴びたのにいっこうに目がパッチリする気配がないわ。単なる時差ボケって訳でもないのかもね。身体はだるく一方だし、頭はガンガンしてくるし、あとはベッドまでたどり着くのが精一杯。
　そのままベッドに倒れこんだと思ったら、すぐに意識がなくなっちゃったみたい。

ＡＣＴⅢ　「LAOCOON」

S60.24.MAR <<H19.11.JAN>>